風水思想における自然景観の捉え方に関する研究

The Understanding of the Natural Landscape in the Idea of Feng-shui

黄 永融*
Yung-jung HUANG

摘要：東洋思想の一つであった風水思想は大地を生きたものとして扱っている。風水思想において大
自然の山は、単なる土と鉱物を混在するものでなく、一個生命をもつ「龍」である。風水では、石は
山の骨であり、土は山の肉であり、川は山の血脈であり、草木はその皮毛である。そして骨肉皮毛は
血脈によって貫通したのである¹⁾。こうした大地は疑似人体と見なされ、人間は自然と一体にならな
ければならないという「天人合一」の思惟が定着した。また、風水は一種の実用技術でもあり、大自
然の風景を読みとり、自然の原則に従って造営物や空間をつくるという東洋の独特な自然景観論とし
て位置づけられる。

1. はじめに

近代の地理学における物理的環境論が、大地を鉱物、無生物として扱う理念であるのに対し、東洋思想の一つである風水思想では大地を生きたものとして扱っている。つまり風水では大地は単に有形の物質体であるに止まらず、人間と同じように血肉躯体が揃った生物であり、しかも自然環境に与える影響は人間も同様に感応を受けられるという自然と人間とを互動させる関係をもつという思考方法を取る。したがって物理的な地理観での自然と人間の二元論に対し、風水の見方では人間は自然の中の一部であると考えられ、人間の生き方は自然と共存・共生、さらに自然と一体にならなければならないという「天人合一」（自然と人間は一体になる）の思想論が定着した。

また、風水は一種の実用技術でもあり、古人の無数の優れた生活経験を蓄積して作った法則であるとも考えられる。つまり大自然の風景を読みとり、自然の原則に従って周囲の自然環境と調和するように造営物や空間をつくるという自然景観に配慮した計画論として位置づけられる。

風水論の歴史的な検証や風水の実際の適用に関する分析については、これまで日本の古代宮都²⁾及び台北の市街地³⁾を事例とした研究で行ってきた。本論文は、一連の研究をより進展させる目的で、文献調査に基づき、風水論に含まれている自然景観に配慮した計画概念の整理を目的としたものである。なお、風水理論には、自然地形、景観を重視する「形派」と羅盤（コンパス）を用いて方位を見る「理派」という二つの流れがあるが、本論では、風水形派による定義の解釈から風水の基本理念を究明し、さらに風水の実践技法の分析を通じて、風水思想による自然景観の捉え方について考察を加えて行きたい。

2. 自然環境から生まれた風水の語義

「風水」は「堪輿」、「地理」或いは「陰陽」とも呼ばれる。この「堪輿」については、「堪とは天道であり、輿とは地道である。」と東漢の許慎が『淮南子』の「天文訓」に記し、また、「地を輿と為すと謂ふ者は、天地覆蓋の徳有り、故に天を蓋と為すと謂ひ、地を輿と為すと謂ふ。」と『史記』にもある。これによれば「堪輿」は天地を指し、またその天地の変化を観察することだという。その他、『易経・繫辞伝上』では、「仰いで以て天文を觀、俯いで以て地理を察す。此の故に幽明の故を知るなり」と記されており、

この「幽明」とは、現在の言葉で言うところの「宇宙」や「自然」を指しており、簡単に言えば、天文を観察し自然を認識することで、宇宙の万象が理解できるということである。

また、「地理」からの説明を試みれば、中国の古代社会においては、地理を観察し、地勢を相するという考え方があったため、風水の起源は生活経験などに基づいた古代の「地形学」であると考えられる。つまり、風水とは自然の地形地物や四季の気候変化などを観察することで、さらに人間に対して好適な居住環境を選択する技術である。

さらに「陰陽」という別名でも呼ばれているが、これは陰陽を基本原理とした風水思想では自然地形の高低、凸凹、突陥などの現象を、すべて陰と陽で解釈しているからである。唐の国師であった楊均松の『青鳥経註』によると、「陰陽符合すれば、天地交通し、内気萌生し、外気成形し、内外相乗なり、風水自ら成る」⁴⁾とあり、つまり、風水にふさわしい地形があれば、「陰陽調和」の状態になれるということである。

風水の理念では人間が生存している大地を一つの太極と考えている。太極とは陰と陽に分けられる存在を意味し、

図-1 太極図

さらに陰の中に陽があり、陽の中にも陰が存在しているとする概念である（図-1）。その陰と陽を地形において具体的に説明すると、陰は凹陷・低下の意味に対し、陽は突出・高起を象徴する。風水による選地の手法では、その地形の「陰陽」を調和するように考える。それを太極の理念を用いて説明すると、太極とは陰と陽から生成され、さらに陰の中に陽があり、陽は陰を含めると陰陽安定の状態になる、ということになる。この理念に基づいて、風水地形の選択の一つでは「高処取低」（すべて高所である地形の中で低平の場所を選ぶ）、「低処取高」（すべて平野である地域では少々高い台地を探す）という原則となる。それは地形の高低・凸凹を調節し、陰陽調和を配慮するためである（図-2）。

「風水」という言葉から考えれば、自然環境の中でもっとも大切な要素が、気候を大きく左右する「風」と「水」であり、古代人にとって、天候の安定は生活の保障である。暴風や洪水が古代人の敬畏の対象となり、それを避けまた安定した生活を確立す

*大阪大学工学部環境工学科

図-2 『地理人子須知』による「動靜陰陽図」とそのイメージ図

るためには「風」や「水」を制御することが基本と考えた。そういった考えの根底にある自然現象の崇拝が、風水の起因の一つであると考えられる。一方、風水思想はすべて「気」という概念で成り立っていたのである。東洋思想におけるこの目に見えない「気」とは万物の動源であり、その概念は「中国に古代から伝わる宇宙・自然・生命を成り立たせている根元的生命力」と理解されている。気はたえず流動的な状態であり、重く濁り、また軽く澄んだ部分も存在している、その重く濁った状態を陰、澄んで軽くなった状態を陽と言い、これは陰陽両気が対立して存在する状態である。この陰陽両気については郭璞の『葬経』によると、「陰陽の気、吐き出すと風となり、昇ると雲となり、降りると雨となり、地中に流れている時は生氣となる。」⁹⁾とあり、陰陽の気は地面上に出ると、風や雲・雨などの可視的な物質になる、地中に潜って行けば、不可視の「気」に変身する。また、『葬経』には「気は風に乘ずれば即ち散じ、水にへだてられれば止まる。古人はこれを聚めて散ぜざらしめ、これを行かせるも止まることあらむ。故にこれを風水と謂う。」⁹⁾と記され、これによると、風水思想では、可視的な「風」や「水」を制御するだけでなく、地中に隠れた不可視的な「気」も、止めたり集めたり工夫しているのである。可視・不可視の二層性に基づいて、人間の生存環境に強く関わっている「風」と「水」の両要素が「風水」という言葉の起因と考えられる。

以上のような風水の語義からの検証によると、風水思想は人間が存在する自然環境の観測に基づいて成立した生活の哲学ともいえ、また、自然の条理にしたがって地上の諸施設の配置を合致させる計画論でもある。

3. 自然の山に生命を吹き込む「龍脈」概念

風水思想によって自然地形に生命を与える様子を表したものが龍脈理念である。「龍脈」とは、地表に起伏しながら連なって走る山脈（山並み）をいう。なぜ自然の山が龍の姿に象徴されたかということは、明の『地理人子須知』に「地理家（風水師）は山を以て龍と名づくは何ぞや、山の変態が千形万象、或は大或は小、或は起き或伏す、或は順ひ或は逆ふ、或は隠れ或は顕れる…惟だ龍を然と為す、故に以て之を名づく、其の潜見飛躍を取り、変化を測ることと莫し」⁷⁾という解釈が付けられている。また、龍脈の源流とは、中国の北西に位置した崑崙山であったと定説され、ここから北幹龍・中幹龍・南幹龍という三本の大龍脈が東に向いて走っていくのである（図-3）。そしてこれらの龍脈は主脈から支脈に、さらに支脈から微山脈を生じ、樹木の幹、枝のように大地の至る所に網状に分布していた。このような大地の筋になった龍脈のうち、地表に隆起し山脈になるものを「山龍」といい、この龍脈が平野或いは平地にきて、少し突起し、土堤・台地になったものが「平陽龍」と呼ばれる。この龍脈の概念によると、地表の高低差から少しでも高いものを山（龍脈）となし、一寸低いものを水とする。したがって雨の降った場合、一寸低き地に水が流

図-3 『三才図会』による中国の三大幹龍図

れれば、一寸高き地は堤（龍脈）となる。つまり風水の見方は地表の僅かな高低関係によって、龍脈あり水ありと認めるのであり、風水は自然環境の微地形を分析する技術であるとも考えられる。

4. 大地を模擬人体とする風水理念

風水思想では龍脈に沿って地中を流れる「気」はまた「地気」とも呼ばれる。この地気は龍脈の中を均質に流れているわけではなく、地形構造によって稠密になったり希薄になったりして、水のように流れている。この「気」は龍のように起伏して連続する山脈の中を流れ、最も集中する所は「龍穴」という。また、その「気」の集中した龍穴が吉祥地と見なされ、そこに都市や建物を作れば大地の「気」を感應することによって繁栄できると信仰されていた。

風水の理念ではこの大地が模擬人体であって、地下を龍脈に沿って走る「気脈」は、人間の身体を流れる脈に例えられ、人体の「経絡」と対応しているとみなされている。この人体の血管・神経とは別の循環系統である「経絡」は、身体における気の道で、気はそれに沿って全身を巡っている。大地も人体と同じように地中に気が巡っていると考えられ、また、「気」の集中した龍穴は身体の経絡における重要な鍼や灸のポイント「経穴」（ツボ）と照応するのである。この概念について『地理人子須知』に「曰はく脈（龍脈）なる者は何ぞや、人身の脈絡の由る所は運行し一身なり」、「穴（龍穴）なる者は、蓋し猶ほ人身の穴の如し」⁸⁾と、また『雪心賦』に「点穴（龍穴）は猶ほ点艾（灸）の如し」⁹⁾と記されている。

5. 自然的景観を活用した風水技法

(1) 「山河襟帯」の圍繞空間

風水思想における理想的な地勢は何層にも山々に囲まれた状態である。具体的に言えば、一種の「圍繞」の空間構造であり、即ち風水が追求する「気を聚めて散せず」という吉地の状態である。風水理念において龍脈の中を流れている「気」には、「風に乘ずれば即ち散じ、水にへだてられれば止まる」という原則があり、「気」が風に散らされないように、山に囲まれる地形が望まれるのであり、また、「気」が停止せず去っていくことのないように、川によって界する必要があると定められている。この「気」が洩れないように、敷地の四方をぐるりと囲む形になって、風をおさめることができる地形が、いわゆる「蔵風納水」（風を蔵する、水を得る）の地形である¹⁰⁾。こうした圍繞された地形によってその中に「気」が貯められ、万物がこの「気」によって育まれるのであり、都市や集落・墓地などをそこに造ると、莫大な幸福をもたらすことができると信仰されたので、風水的な理想地形はその「気」を囲い込むという「圍繞」の空間構造を選択したのである。風水思想による都市や集落の選地は、「山河襟帯」の地で営む状況がよく見られる¹¹⁾。こうした「山が襟のように取り囲み、川が帯のように巡り流れ、自然の地勢を取り入れて都城や集落を造る」

という造営法を、風水術ではよく着物の衿の打ち合わせと帯に囲まれた様子に比喩するのである¹²⁾。しかし、風水で言う「圍繞」とは、完全に閉じた空間ではなく、龍穴の所在地から周辺の山並みを眺めた時、犬牙が交錯したような山脈の重なりにより一種の閉鎖空間と感じられる状態を指し、視覚的な印象に基づく判断であると見られる(図-4)。

(2) 四方対称の「天心十道」論

風水的な封鎖性のある空間構造について、もっと具体的に分析すれば、それは前後左右が対称的な地形景觀の存在と見られている。この理念は風水思想の中で「天心十道」で説明されていた¹³⁾。「十道」というのは論、「龍穴」(風水上の一番よい場所)の前後左右に対称的に位置する山である。「天心」には「宇宙の中心」という意味があり勿論ここでは龍穴を指している。

この「天心十道」に要求される地形は、前後に相対する山は左右に偏してはいけなく、左右の山も高低の差がないという極めて十字対称の地形であり、そういう地形構造を備えれば風水の吉地となる。このように四方に対称的に囲まれた地形概念を、風水思想では「四神相応」という言葉で表現している。

「四神相応」の起源を探求すると、それは中国古代の天文星象においてみられたものである¹⁴⁾。古人の天文観念において天球を90°ごとに四つの象限に分け、そこにある七宿(七個星群)ずつの星座を合わせて二十八宿と呼んだ。その四つの象限中の星群をそれぞれつなげてできた形が、伝説中の青龍・白虎・朱雀・玄武という四神獣の形態であり、空の東・西・南・北に対称に存在している。風水術はその天文現象を具体化して、自然地形の四方に対して左は青龍、右は白虎、前は朱雀、後は玄武という名称を与え、これによって自然地形が前後左右に均等に対称でき、景觀のバランスが取れる場所を「四神相応」の吉地と呼んだのである。こうした地形の選択において対称な地形構造を重視する風水思想に基づく理想的な地形構造とは、地形の縦軸が「主山-坐山-案山-朝山」という山列を成し、横軸に左右対称の「青龍・白虎」の山を配し、またその山々に囲まれた空間として「明堂」があるという地形構造である(図-5)。

(3) 地形の基準点になった「案山」の形象

風水による地形構造の見方では造営物を置くべき龍穴の前方の近くに位置する山を「案山」という。案とは人の座前に使用する机の意味で、龍穴に対してまさにその机に相当する象徴的な山である。「案山」の選択については、山の高さよりも山稜線の形が重視されている。造営物(都城・住宅・墓など)を置くべき龍穴に面する「案山」は、いずれも秀麗な姿をした山が選定される。たとえば、三台山(三峰をもつ山)、馬鞍山(鞍のような二つの峰をもつ山)、筆架山(筆置きに似た姿で、三峰や五峰がある)、横琴(横たえた琴に似た山)、眠弓(弦を張らない弓に似た山)、その他は亀蛇、天馬、伏虎、臥牛、軍旗、鏡台など、動物から文具や装飾品まで渡る名称をつけた山が揃っている(図-6)。こうした風水の専門用語を使って命名された山や地名は、中国全土にわたってよく見出される¹⁵⁾。

図-6 宋・『龍格』 明・『地理人子須知』による案山の形態

図-4 龍穴を視点として見た圍繞空間 図-5 地形が四方対称となる天心十道論

このような山の形は風水書の中に数百種類に分けられている、これは龍穴に置く造営物の向きや位置が案山の所在地によって左右されているからである。つまりまず建造物の向きが案山を前方の基準点として決められるのである。その龍穴から案山を結んだ線が、地形のプランにおいて大切な中軸線であり、これを中心として建造物の全体プランが左右対称に作られた。さらに、案山を基準点として造ったプランは平面的なものに止まらず、高度も含めて一種の三次元的な空間構成と考えなければならないのである。

龍穴の前方の朱雀に相当する案山は、左・中・右寄りの別があり、龍穴上の建造物の向きや位置の高低或いは左・右また正中にあるかどうか、すべて案山の高低遠近の次第である(図-7)。案山が高すぎたり近すぎたりすると、山の存在が強く意識されすぎるので、龍穴を圧迫する恐れがある。案山が低すぎたり遠すぎたりすれば、山は概念的な存在と見なされ、「気」を散じやすいと考えられるのである(空ける空間が広すぎて守れるものがない)。従って、案山の所在は直接に龍穴の位置に影響を与える(図-8)。その具体的な目安は、龍穴の位置から案山の山稜線を見て、その最頂点は眉に等しい、最低点は心に応ずるという原則である(図-9)。

(4) 穴前(龍穴の前方)空間に対する景觀の修景

龍穴の前(墓ならば墳前、建造物ならば建築物の正面)の青龍と白虎の山脈に囲まれた平坦な広場を「明堂」と称する。「明堂」というのは、天子が群臣の崇めを受ける場所や臣を集めて政事を合議する場所を意味するのである。風水で言う「明堂」とは龍穴に対して礼拝するところであり、また龍穴から溢れた「気」の結集する空間でもあると意識されている¹⁶⁾。「明堂」となる条件としては方・正・平・円という形態、さらに龍穴に向かって有情な形状(龍穴に向かって湾曲に抱かれる形を有情という)が要求されている。即ち整形の平坦地が望まれるのである。したがって、龍穴の前の空間が傾斜、散乱、破碎、無情(龍穴に反逆する)の風景であれば、「気」を集結しないと見なされ、人工的な補修や修景などの作業を工夫しなければならないのである。

具体的な龍穴の前(案山の方向)の景觀の修景として、崩れた山の補強や盛土、禿山の植林、或いは流れの激しい河川に対する改修作業が行われるのである。また、自然景觀のバランスを重視して、地形の傾斜、景觀の欠陥がある場合は、樓閣や風水塔を建設したり(図-10)、土石を積んだりといった修景も行われている¹⁷⁾。その他、景觀の完全な美を求めるために、龍穴の前方の風

図-7 案山の所在と龍穴の位置

景が散乱、破碎した状況にあれば、植林により隠蔽するという手法もよく風水術に使われる。

6. まとめ

以上の風水理念の解析や風水技法の考察の結果、風水思想における自然景観の捉え方を次のようにまとめることができる。

- ① 古代から伝承される風水思想の思惟世界においては、大地はひとつの生命体と見なされ、さらに生活空間としての物理的な地形と一体になるという「天人合一」の理念が実現されている。
- ② 風水によって敷地を選定する際、自然地形の変化に対する注意深い観察がなされており、風水とはまた自然環境の微地形を分析する方法論でもあると考えられる。
- ③ 風水思想の「蔵風納水」という風や水を制御する理念による封閉空間から、風水に求められる理想的な環境とは外敵や風砂の侵入を防ぐ構造を採用したという「防守保護」の概念であると理解される。
- ④ 風水による選地や造営物の建て方は、前方の山の形や周囲の地形に合わせるような位置や規模となるよう考慮されている。つまりこれらは自然環境の一部であり、自然の条理に従ってその配置等を合致させなければならないという理念によるものと言える。
- ⑤ 風水で重視される地形の対称性を保つことやその高低、凸凹を調和させることによる「陰陽調和」への配慮とは、一種の景観のバランスを重視することとも見られる。したがって視覚景観の不均衡な場所や傾斜した場所に対しては、人工的な遮蔽や構築を加えて、景観のバランスを取り戻すという修景の行為も行われる。
- ⑥ 風水による地形や景観の欠陥を補うための盛土、植林、河川改修などは、結果として環境保全の効果をもつことから、風水技

図-8 龍穴から見た近すぎる案山（左）と遠すぎる案山（右）

図-9 龍穴の位置と案山の高さの関係

図-10 左右の景観のバランスを風水塔によって補う

法は治山治水の役割を果たしていたと考えられる。

風水思想におけるこのような自然環境ないし景観の捉え方が如何に実際の都市建設等に反映したかについて既報(注2, 3)で一部論じたところである。今後さらに具体事例の分析を加え、風水思想がもつ環境計画手法としての体系的な認識を試みて行きたい。

注釈：1)『水法極玄』(司馬陀頭、『堪輿奇書』に所収、喜年来出版、1986年)に「夫石為山之骨、土為山之肉、水為山之血脈、草木為山之皮毛、骨肉皮毛、皆血脈之貫通也。」とある。

2)黄 永融・本多昭一「日本古代宮都の敷地選定と中軸線計画について——風水思想からみた古代宮都計画の研究」、日本建築学会計画系論文集、474号1995、8

3)黄 永融・鳴海邦碩「清代末期における台北市街地の形成過程とその特質に関する考察」1995年度第30回日本都市計画学会学術研究論文集。

4)『青鳥経註』(唐・楊均松、『地理天機會元』に所収、武陵出版、1986年)「陰陽符合。天地交通。内氣萌生。外氣成形。内外相乘。風水自成。」とある。

5)『葬経』に(晋・郭璞、『地理天機會元』に所収、武陵出版、1986年)「夫陰陽之氣。噫而為風。升而為雲。降而為雨。行乎地中而為生氣。」とある。

6)『葬経』に(晋・郭璞、『地理天機會元』

に所収、武陵出版、1986年)「氣乘風則散。界水則止。古人聚之使不散。行之使有止。故謂之風水。」とある。

7)『地理人子須知』(明・徐善繼・徐善述竹林書局1989)「地理家、以山名龍何也、山之變態千形萬狀、或大或小、或起或伏、或逆或順、或隱或顯、...惟龍為然、故以名之、取其潛見飛躍、變化莫測」とある。

8)『地理人子須知』(明・徐善繼・徐善述竹林書局、1989年)「日脈者(龍脈)何也、人身脈絡氣血所由、運行而一身」とある。

9)『雪心賦』(唐・卜則魏、『地理天機會元』に所収、武陵出版、1986年)「穴者(龍穴)、蓋猶人身之穴」とある。

10)『雪心賦』に「但求穴裏藏風」と、『葬経』に「風水之法、得水為上、藏風次之」とある。

11)例えば、日本の平安京の遷都の詔に「山河襟帶、自然作城」と記されている。

12)例えば『地理人子須知』巻六上に「合襟水者、穴前界脈、上分下合之水。如胸前衣襟之交合、故名合襟水也。蓋脈來則有分

水以導之、脈止則有合水以界之」と記した。つまり胸の前に(龍穴の前)衣の襟を合わせているような形勢を指す。

13)『黄囊経』(唐・楊均松、『地理天機會元』に所収、武陵出版、1986年)に「天心生突窟、十道微微正好扞」とあり、『地理人子須知』に「天心十道者、前後左右四心之山也、穴法得後有蓋山、前有照山、左右兩畔有夾耳之山、謂之四心」とある。

14)四神相応の概念に関する二十八宿に記載は『史記』の「天官書」や『淮南子』の「天文訓」或いは『漢志』などに記載される。

15)例えば、南京の獅子山、覆舟山、台湾基隆の鷄籠山などがある。

16)『金璧玄文』(宋・廖金精、『地理天機會元』に所収、武陵出版、1986年)に「明堂氣聚左右抱(明堂に氣を集めて、左右の青龍・白虎に抱かれる)」とある。

17)例えば前方の山稜線の右側が高く、左側が低い場合は左の山頂に風水塔を建て、左右のバランスを補う手法である。

Summary : Feng-shui, one of the eastern ideas, proposed the earth as a “creature”. The idea of Feng-shui teaches us that the mountain would not be composed by the mineral and soil but has soul and spirit of a “dragon” (ryuu). The stone reflects the mountain’s “bone”; the soil is the mountain’s “meat”; and the vegetation is defined as the mountain’s “skin or epidermis”. The bone, meat and skin are connected by the river which is as the mountain’s “blood line”. The earth has been considered as a metaphor of the human body, so that we should keep in mind “the unity of people and nature”. In this way, Feng-shui as the eastern theory contributes a specific useful technique in reading the landscape to find a natural principle for planning and designing building and space.